

島崎久彌先生定年退職記念号に寄せて

経済学部長 池 上 和 夫

島崎久彌先生は、平成十一年三月三十一日付けをもって本学を定年ご退職されました。

先生は、昭和二八年東京大学法学部政治学科を卒業後、直ちに東京銀行に入行され、本店営業部、業務部勤務の後、調査部に移られ、大阪支店調査課長などを歴任されるなど、主に調査畑のお仕事を担当されました。この間、多くの大学で国際金融論、外国為替論を講じておられましたが、退社後、関東学院大学経済学部を経て、平成四年四月に本学経済学部教授に就任されました。以来ご定年まで国際金融論、ゼミナールなどを担当され、経済学部教育においても多くの足跡を残されました。

先生のご著書には、金の商品性と通貨性を論じた『金の世界』や『金と国際通貨』、人類史上空前の実験を試みつつあったECの通貨統合に至るまでの長い軌跡を分析した『ヨーロッパ通貨統合の展開』、EUの政治、社会統合を対象にした『大欧州圏の形成』、EMU創設計画の展開過程を分析した『欧州通貨統合の政治経済学』などがあります。これら単著を含め、一〇〇篇をこえる多くの論文は国際金融、通貨問題をテーマにしておりませんが、その研究方法は理論的、歴史的、実証的であり、理論と歴史を政治経済学的視点より分析するという方法を探らています。その方法論は、明治の初頭から太平洋戦争に至るわが国対外金融の歴史的展開過程の分析にも用いられ、日経・経済図

書文化賞を受賞された学位論文、『円の侵略史』にも結実されております。そこには、若い頃哲学への途を志し、日頃から、経済学者は文学に学べと主張されて、経済学という狭い分野だけからものを見ることに警鐘を鳴らしていた先生のお考えの一端が表れていると思われまます。

本学経済学部での在任期間は七年間であり、決して長い期間ではありませんでしたが、その齒に衣著せぬ論法は、経済学部には大きな刺激を与え続けて参りました。しかし、先生の直言的言説にもかかわらず清涼感が残ったのは先生のお人柄によるところが大きかったからでありました。

先生は、ご退職後も引き続き研究に取り組んでおられ、ご退職された年の九月には、『世界経済のリージョナル化』を上梓され、さらに十一月にも『通貨危機と円の国際化』を世に問われるなど精力的にお仕事をなさっております。お若いときはお体が弱かったとのことですが、今後とも健康に留意されて益々お元気でご研究を続けられることを心からお祈り申し上げます。